

論文

## 東アジアにおける貝製仮面およびその類似製品に利用された貝類の同定

黒住耐二

千葉県立中央博物館  
〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2

**要 旨** 本稿では東アジアの主に先史時代遺跡から報告された貝製仮面（貝面）およびその類似製品（参考資料）についての貝類学的な再同定を行い、従来とは異なった同定結果を示したものである。中国河南省殷墟出土のホタテガイが韓半島東岸中北部からもたらされた可能性も想定される等、貝類の搬入に関しても考察した。

その結果、従来イタボガキの左殻とされてきた著名な熊本市阿高貝塚と黒橋貝塚のカキ類はスミノエガキであり、前者は左殻、後者は右殻と考えた。その他のカキ類に関しても、従来の同定とは異なる可能性の高いことを指摘した。

貝の搬入や移動の問題を考えるために、韓半島南岸の先史遺跡からの大形カキ類の出土例を検討し、金海会峴里貝塚の種はスミノエガキであると判断したが、阿高貝塚等へは持ち込まれたとは考えにくいとした。熊本県水俣市南福寺貝塚のマダカアワビも、その生息環境から最も近距離の場合でも、同種の貝製仮面の出土した沖の原貝塚の立地する熊本県天草の外海岩礁域からのものであろう。韓国釜山東三洞貝塚・同徳積群島・中国河南省殷墟で出土しているホタテガイは、韓半島東岸中北部の日本海に分布し、この地域から各地へ搬入されたと考えた。

**キーワード** 貝面 阿高貝塚 黒橋貝塚 スミノエガキ ホタテガイ 殷墟

対馬海峡を挟む両岸地域、すなわち九州北部から韓半島南部にかけての地域は、縄文時代中期から後期において結合式釣り針等の共通する漁撈具を利用していることから、環玄界灘漁撈文化圏として一般的に把握されてきた（島津，1992；木村・中山，1992；山崎，2001，2010）。貝を用いた仮面（以下、貝面：図1）も、この文化圏の一要素とされ、これまでも集成や利用法の検討等、多くの研究が行われてきた（江坂，1960，1974；磯前，1991；島津，1992；中山，1992；山崎，2001，2010；水ノ江，2002）。その中で、貝面に利用された貝は、イタボガキ・ホタテガイ・マダカアワビの3種であると報告されている（山崎，2001，2010）。

最初に発見・報告された熊本県阿高貝塚の貝面は、江坂（1960）によるイタボガキという報告以降、この同定結果が定着している。筆者は、阿高貝塚の貝面は木村・中山（1992）や永野・正岡（2010）に図示された写真から、殻が大形で放射肋が認められず、イタボガキではないと思っていたが、カキ類の分類に有効な内面殻頂部を観察することができなかった。今回、この阿高貝塚例を含めい

くつかの貝面およびその類似製品を見ることができたので、未だ実見できたものは少ないものの、文献も含めてこれらの同定結果について報告する。

なお、貝面と考えるかどうかや各資料の帰属年代等の考古学的側面に関しては、専門外であるため、検討等を行っていない。

### 検討および比較現生資料

貝面およびその類似製品に関しては、山崎（2001，2010）と高橋（2007）でほぼ網羅されていると考えられ、これらの研究に基づいた。ただ、これらに含まれていなかった韓国釜山・東三洞貝塚の例（河，2007）を含めた。実見したものは、阿高貝塚・黒橋貝塚・東三洞貝塚・下本山岩陰の5例で、その他のものは実測図および写真により検討した。今回対象とした遺跡を図2に示した。

考古資料の同定を行うために、千葉県立中央博物館に登録されている現生標本も比較資料として用いた。CBM-ZMは同博物館の登録番号である。

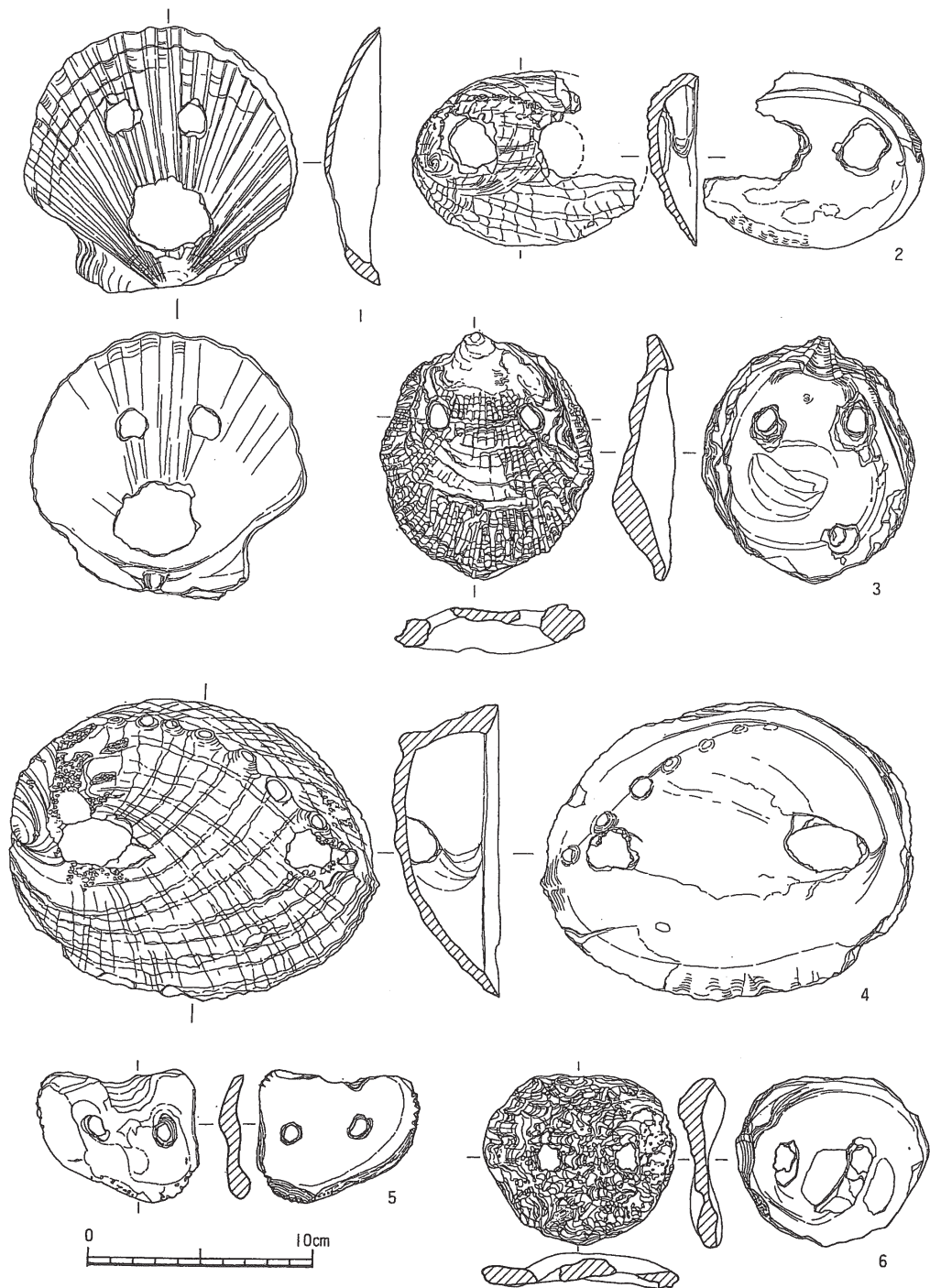


図1 貝面 (山崎, 2001). 1 : 東三洞貝塚. 2 : 南福寺貝塚. 3 : 桑原飛櫛貝塚. 4・6 : 沖の原貝塚.  
5. 佐賀貝塚.

Fig. 1 Shell Mask (Yamazaki, 2001). 1 : Dongsam-dong SM, Busan, Korea.  
2 : Nampukuji SM, Kumamoto, Japan. 3 : Kuwabarahigushi SM, Fukuoka, Japan.  
4 & 6 : Okinohara SM, Amakusa, Japan. 5 : Saga SM, Tsushima Is., Japan.

## 結果および考察

### 1. 貝面に利用された貝類の種類

表1に、今回の最終的な同定結果を、これまでの見解と検討文献等と共に示した。この表では分類学的なまとまりとして示したが、以下の検討は発見順とした。

#### a) 阿高貝塚：熊本県熊本市 (図3)

今回の同定結果：スミノエガキ，左殻

これまでの同定結果：イタボガキ，左右殻の記述なし (江坂, 1960)；イタボガキ，左右殻の記述なし (江坂, 1974)；イタボガキ，左右殻の記述なし (中山, 1992)；イタボガキ，右殻 (島津, 1992)；イタボガキ，左殻 (山崎, 2001, 2010)

備考：今回、実見し、同定を行った。殻は大形で、殻表に放射肋を持たず、やや軽かった。殻頂部内面の観察では、両縁に刻みは観察できず、幅広い韌帯溝が確認できた。これらのことから、この資料はスミノエガキの左殻であると判断した。資料を実見したが、殻の内面に、他生物の付着・穿孔や顕著な磨滅等はみられず、死殻であるとは確認できなかった。

#### b) 南福寺貝塚：熊本県水俣市 (図1-2)

今回の同定結果：マダカアワビ

これまでの同定結果：マダカアワビ (山崎, 2001, 2010)

備考：永野・正岡 (2010) に図示された資料を元に同定を行った。殻表に強い畝状の肋を有し、螺肋が不明瞭であることからマダカアワビに同定できる。日本に分布するアワビ類 [亜属] (*Haliotis* (*Nordotis*)) には3種が知られている。殻が扁平で、丸みを帯び、殻表に明瞭な螺肋を有し、畝状の肋を持たないメカイアワビ。殻はやや高く、丸みを帯び、殻表に明瞭な螺肋を有し、時に極めて顕著になる畝状の肋を持つマダカアワビ。殻はやや高く、やや細長く、殻表に弱い螺肋とやや明瞭な畝状の肋を持つクロアワビである。これらの特徴を組み合わせることで検討することにより、種の同定を行うことができる。なお、本資料に関しては水ノ江 (2002) の詳細な考古学的な観察がある。

#### c) 東三洞貝塚：韓国釜山 (図1-1)

今回の同定結果：ホタテガイ，右殻

これまでの同定結果：イタヤガイ，左右殻の記述なし (江坂, 1974)；イタヤガイ，左右殻の記述なし (中山, 1992)；イタヤガ [キ] イ，左右殻の記述なし (島津, 1992)；ホタテガイ，左右殻の記述なし (山崎, 2001)；ホタテガイ，右殻 (山崎, 2001)

備考：東三洞貝塚展示館でケース内の実物資料を見

ることができた。約13cmであるサイズ・殻の膨らみ・20本程度の肋から、ホタテガイの右殻と同定できた。ホタテガイに類似現生種はなく、同属の化石種は新生代に多くの種が知られているが、見た限りでは化石の質感とは感じなかった。

#### d) 黒橋貝塚：熊本県熊本市 (図4)

今回の同定結果：スミノエガキ，右殻

これまでの同定結果：イタボガキか，左右殻の記述なし (中山, 1992)；イタボガキ，左右殻の記述なし (島津, 1992)；イタボガキ，蓋 (右殻) (高木・村崎, 1998)；イタボガキ，左殻 (山崎, 2001, 2010)

備考：今回、実見し、同定を行った。殻はやや大形で、円形に近く、扁平で、殻表にはやや密な成長肋が認められた。後述するイタボガキの右殻に類似していたが、溶解は認められたものの、殻頂部に刻みはなく、殻表もやや凹凸を有することからスミノエガキと同定した。弾体溝は認められず、右殻と考えた。ただ、特徴がやや不明瞭で、もしかすると左殻の可能性も残る。また、本資料でも阿高資料と同様に、他生物の付着・穿孔や顕著な磨滅等は認められず、死殻であるとは判断できなかった。

本貝塚の貝類遺体は菊池 (1998) により詳細に報告されており、その中にはスミノエガキは含まれていない。また、この報告では、小形のマガキとは異なった大形個体が1個体のみ識別・図示されている。この標本は筆者の見解ではスミノエガキとなる可能性も考えられたので、貝面と同時に検討したが、殻頂部の刻みはなく、マガキ属であり、その重い質感から、筆者もマガキに同定した。なお、阿高・黒橋両貝塚に近い古代の下江中島遺跡の貝塚から出土した貝類遺体を検討する機会を与えて頂いたが (黒住, 2013)、菊池 (1998) の結果と同様に小形のマガキのみで、中大形のスミノエガキは認められなかった。

#### e) 桑原飛櫛貝塚：福岡県福岡市 (図1-3)

今回の同定結果：イタボガキ，左殻

これまでの同定結果：イタボガキ，右殻 (井澤, 1996)；イタボガキ，左殻 (山崎, 2001, 2010)

備考：井澤 (1996) のFig. 35-49の実測図を元に同定を行った。殻表に密な縦肋があり、内面の殻頂部には弾体溝と考えられる部分が図示されていることから、イタボガキの左殻と同定した。

本貝塚の貝類遺体組成は、ブロックサンプルによりかなり多くの個体が抽出・検討されている (下山, 1996)。しかし、この中には、イタボガキは含まれていない。このことから、貝面に利用された本

表 1 貝面および類似製品の同定結果. Table 1 Result on identification of species of Shell Masks and their reference materials.

貝面 Shell Mask	今回の同定結果 Present identification	従来の同定結果 Previous identification	検討文献等 References etc.
阿高貝塚, 熊本県	スミノエガキ/左殻	イタボガキ/左殻 (山崎, 2010)	資料実見
Adaka SM, Kumamoto, JPN	<i>Crassostrea ariakensis</i> / LV	<i>Ostrea denselamellosa</i> / LV	
黒崎貝塚, 熊本県	スミノエガキ/右殻	イタボガキ/左殻 (山崎, 2010)	資料実見
Kurobashi SM, Kumamoto, JPN	<i>Crassostrea ariakensis</i> / RV	<i>Ostrea denselamellosa</i> / LV	
桑原飛鶴貝塚, 福岡市	イタボガキ/左殻	イタボガキ/左殻 (山崎, 2010)	井澤 (1996); 永野・正岡 (2010)
Kuwabarahigushi SM, Fukuoka, JPN	<i>Ostrea denselamellosa</i> / LV	<i>Ostrea denselamellosa</i> / LV	
佐賀貝塚, 対馬, 長崎県	イタボガキ科 (イワガキの可能性もある) / 左殻	イタボガキ/左殻 (山崎, 2010)	正林 (1989)
Saga SM, Tsushima Is., JPN	Ostreidae gen. et sp. (? <i>Crassostrea nippona</i> ) / LV	<i>Ostrea denselamellosa</i> / LV	
沖の原貝塚, 熊本県	カキ類 (カキツバタの可能性もある) / 左右不明	イタボガキ/左殻 (山崎, 2010)	山崎 (2001)
Okinohara SM, Amakusa, JPN	Ostreoida fam. gen et sp. (? <i>Parahyotissa inermis</i> = <i>imbricata</i> ) / ?	<i>Ostrea denselamellosa</i> / LV	
東三洞貝塚, 釜山, 韓国	ホタテガイ/右殻	ホタテガイ/右殻 (山崎, 2010)	資料実見 (ケース内)
Dongssam-dong SM, Busan, KOR	<i>Patinopecten yessoensis</i> / RV	<i>Patinopecten yessoensis</i> / RV	
南福寺貝塚, 熊本県	マダカアワビ	マダカアワビ (山崎, 2010)	永野・正岡 (2010)
Nampukuji SM, Kumamoto, JPN	<i>Haliotis (Nordotis) madaka</i>	<i>Haliotis (Nordotis) madaka</i>	
沖の原貝塚, 熊本県	マダカアワビ	マダカアワビ (山崎, 2010)	山崎 (2001)
Okinohara SM, Amakusa, JPN	<i>Haliotis (Nordotis) madaka</i>	<i>Haliotis (Nordotis) madaka</i>	
貝面参考資料 Reference material			
島浜貝塚, 福井県	マガキ風と思われる (イワガキの可能性もある) / 右殻の可能性大	カキ類/左右記述なし (高橋, 2007)	田中 (2002)
Torihama SM, Fukui, JPN	<i>Crassostrea</i> ? sp. (? <i>Crassostrea nippona</i> ) / RV?	Ostreidae gen. et sp. / nd	
洗谷貝塚, 広島県	マガキ? / 右殻?	マガキ/左右記述なし (金子・忍澤, 1986)	金子・忍澤 (1986)
Araidani SM, Hiroshima, JPN	<i>Crassostrea gigas</i> ? / RV?	<i>Crassostrea gigas</i> / nd	
彦崎貝塚, 岡山市	イタボガキ/右殻	イタボガキ/右殻/2例 (高橋, 2007)	高橋 (2007)
Hikosaki SM, Okayama, JPN	<i>Ostrea denselamellosa</i> / RV	<i>Ostrea denselamellosa</i> / RV / 2 materials	
蘇釜島貝塚, 徳島群島, 韓国	ホタテガイ/左殻	ホタテガイ/左右記述なし (山崎, 2001)	崔ら (2000)
Soya-som SM, Dokjokdo Is., KOR	<i>Patinopecten yessoensis</i> / LV	<i>Patinopecten yessoensis</i> / LV	
殷墟/小屯M164, 河南省, 中国	ホタテガイ/右殻?	ホタテガイ/左右記述なし (山崎, 2001)	近藤 (1995) の引用図
Yinxu, Henan, CHN	<i>Patinopecten yessoensis</i> / RV?	<i>Patinopecten yessoensis</i> / LV	
殷墟, 河南省, 中国	ホタテガイ/右殻/図示2例とも	ホタテガイ風/右殻 (鍾, 1993)	鍾 (1993)
Yinxu, Henan, CHN	<i>Patinopecten yessoensis</i> / RV / figured 2 materials	<i>Patinopecten</i> sp. / RV	
白浜貝塚, 五島列島, 長崎県	イタヤガイ/右殻/2例とも	イタヤガイ/左右記述なし/2例 (安楽, 1980)	安楽 (1980)
Shirahama SM, Goto Isls., JPN	<i>Pecten albicans</i> / RV / 2 materials	<i>Pecten (Notovola) albicans</i> / nd / 2 materials	
東三洞貝塚, 釜山, 韓国	イタヤガイ / RV / 2 materials	イタヤガイ / 2例 (河, 2007)	資料実見 (ケース内); 河 (2007)
Dongssam-dong SM, Busan, KOR	<i>Pecten albicans</i> / RV / 2 materials	<i>Pecten albicans</i> / 2 materials	
下本山岩盤, 長崎県	ツキヒガイ/右殻	イタヤガイ/左右記述なし (金子・忍澤, 1986)	資料実見
Shimomotoyama-iwakage, Nagasaki, JPN	<i>Amussium japonicum japonicum</i> / RV	<i>Pecten albicans</i> / nd	

LV : left valve 左殻, nd : not described 記述なし, RV : right valve 右殻.





図2 貝面および類似製品出土遺跡。丸：カキ類。四角：アワビ類。  
三角：ホタテガイ類。大：貝面。小：類似製品。

Fig. 2 Distribution of archaeological sites. Circle : ostreid. Quadrangle : large abalone.  
Triangle : pectind. Large : Shell Mask. Small : reference material.

種は、特別な意図で遺跡に持ち込まれて加工されたか、貝面自体が搬入品の可能性も残る。

**f) 佐賀貝塚：長崎県対馬市** (図1-5)

今回の同定結果：イタボガキ科のマガキ属 (*Crassostrea*) と考えられ、イワガキの可能性も高い、左殻

これまでの同定結果：マガキ、左右殻の記述なし (正林, 1989); イタボガキ、左殻 (山崎, 2001, 2010)

備考：正林 (1989) の第96図-251の実測図とPl. 48-251に基づいて同定を試みた。2 cm程度の弾体溝と考えられる部分が存在し、左殻と考えられる。殻表は剥離しているようで、特徴的な形状は図示されていないが、イタボガキのような放射肋はない。また、かなり溶解している可能性も高いが、殻頂部の刻みは認められない。これらのことから、マガキ属ではないかと考えた。殻頂部で残存長が5 cmを越えていることから、マガキではなく、より大形になるイワガキの可能性が高いように思われる。

本貝塚の貝類遺体では、イワガキはリストアップされておらず、マガキもかなり少ない (0.34%)。一方、報告者は潜水漁を想定して、大形のサザエやアワビ類、ミガキボラ・テングニシ等を挙げている (山本, 1989)。筆者は、ミガキボラ・イタヤガイ等

は打上げ個体ではないかと考えており、その中にイワガキが含まれていたことも想定できよう。

山崎氏の示唆があった可能性もあり、桑原飛櫛貝塚の報告書 (井澤, 1996) において、佐賀貝塚資料が貝面の可能性のあることも示されている。本資料は後述の貝面参考資料に含まれる可能性も存在するように思われた。

**g) 沖の原貝塚：熊本県天草市**  
アワビ類 (図1-4)

今回の同定結果：マダカアワビ

これまでの同定結果：マダカアワビ (山崎, 2001, 2010)

備考：永野・正岡 (2010) に図示された資料を元に同定を行った。南福寺貝塚例と同様に、やや強い畝状肋と粗く不明瞭な螺旋肋であることから、マダカアワビと同定した。

**カキ類** (図1-6)

今回の同定結果：カキ類 (カキツバタの可能性もある)、左右は不明

これまでの同定結果：イタボガキ、左殻 (山崎, 2001, 2010)

備考：山崎 (2001) に示された実測図に基づいて同定を行った。殻高8.7 cmで略円形、1 cm程度の厚みを有する種で、殻表はイタボガキほど明瞭ではない

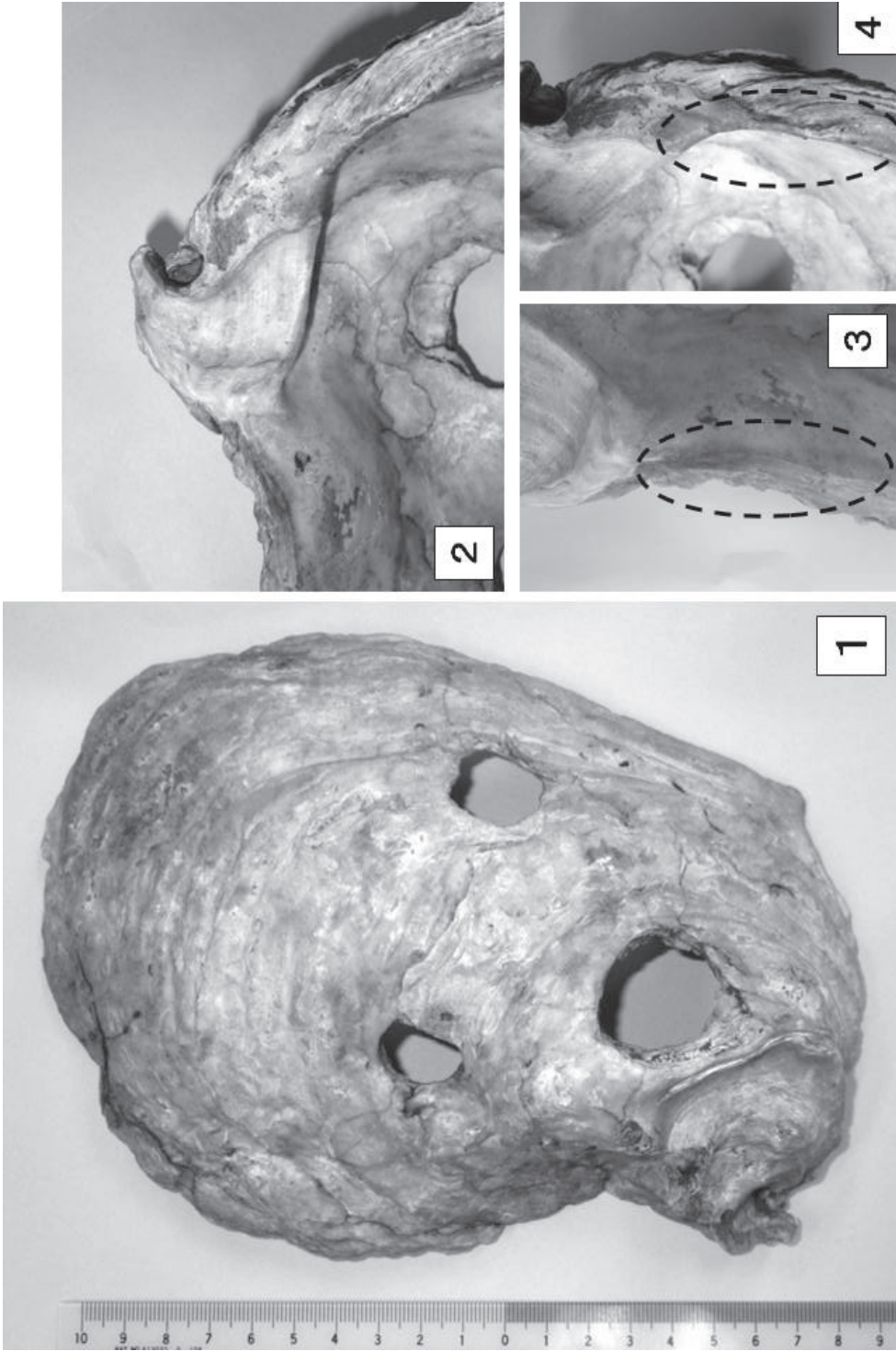


図3 阿高貝塚の貝面 (熊本博物館所蔵). 1 : 全体. 2 : 殻頂部内面 (左殻). 3 : 殻頂部内面前部. 4・6 : 殻頂部内面後部. 破線は刻みのないことを示す.

Fig. 3 Shell Mask of Adaka Shell Midden, Kumamoto. 1 : whole view. 2 : inner umbonal area (left valve). 3 : anterior part of umbonal area. 4 : posterior part of umbonal area. Dashed line : no dentition.



図4 黒橋貝塚の貝面 (熊本県教育委員会所蔵). 1. 全体, 2. 殻頂部内面 (右殻), 3. 殻頂部内面前部, 4. 殻頂部内面後部.  
Fig. 4 Shell Mask of Kurobashi Shell Midden, Kumamoto. 1 : whole view. 2 : inner umbonal area (right valve).  
3 : anterior part of umbonal area. 4 : posterior part of umbonal area. Dashed line : no dentition.



がやや規則的な放射肋が比較的密に存在するという形状が示されている。

このような特徴に基づいて同定を試みると、山崎(2001, 2010)のイタボガキという見解とともに、ベッコウガキ科のカキツバタの可能性も高いと考えられた。資料を実見しないと正確な同定は行えないが、現時点で筆者は放射肋の不規則性と遺跡の立地(外海に近接している)からカキツバタの可能性が高いのではないかと思っている。なお、左右殻は判別できなかった。

## 2. 貝面以外の類似製品

ここでは、山崎(2001, 2010)により参考資料(ここでは類似製品と表記した)として、さらに高橋(2007)により「あえて機能的に分類するなら垂飾として扱うべきだと考え」られ、示されてきた貝面とされていない2孔を有する穿孔品の同定結果についても、貝面同様におよその報告時期ごとに同定結果を述べる<sup>注1</sup>。

### a) 殷墟：中国河南省

今回の同定結果：ホタテガイ，右殻

これまでの同定結果：ホタテガイ類，下(右)殻(鐘，1993)；イタヤガイ，左右殻の記述なし(小屯M164，近藤，1995)；ホタテガイ，左右殻の記述なし(小屯M164，山崎，2001)

備考：殷墟小屯M164の馬遺体の額中央からの出土個体に関しては、中央研究院歴史語言研究所(1972)の報告を見ることができず、近藤(1995)の引用図と山崎(2001)の記述に基づいた。殻長・殻高とも12cmで中央から殻頂よりに2小孔を持ち、引用図では太い肋が18本程度描かれていることから、ホタテガイの右殻と同定した。

鐘(1993)は、殷墟で出土し、1948年に台湾に運ばれ、現在は歴史語言研究所に保管されている海産貝類の検討を行なっている。その中に5個体のホタテガイ類が含まれており、そのうちの2個体を図22a, bとして写真を示している。この図には、2小孔を有するものが示され、図22aはM164出土のものと同大の殻長・殻高は12cmで、殻頂側に孔が存在する。図22bは腹縁側に2孔と殻頂部の前後の耳状突起縁に小孔を持つ計4孔の製品である。いずれも太い肋が約20-25本存在し、ホタテガイの右殻であると判断した。図22aでは穿孔以外の加工は図からは判断できなかったが、図22bでは前後の耳状突起において、明瞭で円形を意識して研磨・整形が行われていると考えられた。

### b) 下本山岩陰：長崎県佐世保市

今回の同定結果：ツキヒガイ，右殻

これまでの同定結果：イタヤガイ，左右殻の記述なし(金子・忍澤，1986)；イタヤガイ，左右殻の記述なし(高橋，2007)

備考：今回資料を実見した結果、殻表は平滑で、膨らみは極めて弱く、鉸板の中央が窪み、内面前後の突出部が前後に開くことから、ツキヒガイの右殻に同定できた。また、ツキヒガイでは左右殻の内面に多数の肋を有するが、この資料では内面の肋をほとんど消失させていた。麻生(1972)で僅かに示されている放射肋は、除かれた肋の残存状況に起因するものと思われた。殻自体が薄質の本種の内面の肋の除去は研磨によるものと推測されるが、かなり注意深い取り扱いを行っていたことが想定される。

### c) 洗谷貝塚：広島県福山市

今回の同定結果：マガキ？，右殻か？

これまでの同定結果：マガキ，左右殻の記述なし(金子・忍澤，1986)；マガキ，左右殻の記述なし(高橋，2007)

備考：小郡(1976)の報告を見ることができず、金子・忍澤(1986)と高橋(2007)の引用図に基づいて同定を行った。これまでの報告でマガキとされており、図から同様に判断した。左右殻の判断は困難であったが、殻頂部に付着部が描かれていないので、右殻の可能性が高いと思われた。

### d) 白浜貝塚：長崎県五島市

今回の同定結果：イタヤガイ，右殻(2例とも)

これまでの同定結果：イタヤガイ2例，左右殻の記述なし(安楽，1980)；イタヤガイ，左右殻の記述なし(中山，1992)；イタヤガイ，左右殻の記述なし(山崎，2001, 2010)

備考：安楽(1980)に図示された2資料の図から、両方ともイタヤガイの右殻であることが確認できる。この資料に関して、山崎(2001)は、このうちの1点は「実見していないので断定できないが、貝面である可能性が高い」としているものの、山崎(2010)でも参考資料として取り扱っている。

イタヤガイの類似種には、シナイタヤとカズウネイタヤおよびハナイタヤが知られている(吉良，1959)。ハナイタヤは、小形で、右殻の放射肋上に細溝を持ち、容易に他のイタヤガイと識別でき、主に下部浅海帯に生息し、打上げ個体は稀である。一方、今回の多くの資料が発掘された九州沿岸には、イタヤガイに極めてよく似たシナイタヤ(吉良，1959)とカズウネイタヤ(奥村・田口，2009)が分布している。色彩や肋数等で識別されているもの



の、筆者は明瞭な区別可能な特徴を把握できておらず、現時点では遺跡出土個体はイタヤガイとして報告しておいても良いと考えており、今回の同定はこの見解によっている。

**e) 蘇翁島貝塚：韓国徳積群島**

今回の同定結果：ホタテガイ、左殻

これまでの同定結果：ホタテガイ類（崔ら，2000）；ホタテガイ，左右殻の記述なし（山崎，2001，2010）

備考：崔ら（2000）の図17と図版35に示されたものから、ホタテガイ左殻と同定できる。ホタテガイの出土例では、右殻利用が多かったが、この資料は左殻を用い、サイズも殻高7cmと小形である。報告された本貝塚の食用等の貝類遺体には、ホタテガイは含まれていない（崔ら，2000）。このことから、本種も意図的な利用のために持ち込まれたものであろう。

**f) 鳥浜貝塚：福井県若狭町**

今回の同定結果：マガキ属と思われる（イワガキの可能性もある），右殻の可能性大

これまでの同定結果：カキ類，左右殻の記述なし（高橋，2007）

備考：今回、原著に当ることができず、田中（2002）の写真から同定を試みた。殻高8cm、殻長4.4cmの長楕円形の殻形で、表面に放射肋は認められず、成長肋は粗いことから、マガキ属で、やや大形であることからイワガキの可能性も考えられた。

殻頂部に付着部が不明瞭なことから左殻ではないと思われる。

**g) 彦崎貝塚：岡山市**

今回の同定結果：イタボガキ2例，右殻

これまでの同定結果：イタボガキ2例，右殻（高橋，2007）

備考：高橋（2007）の図145と図版46の3019と3020に示されたものから同定を行い、サイズ・扁平な殻形・密な成長肋から、報告の通り、2例ともイタボガキ右殻と判断した。

**h) 東三洞貝塚：韓国釜山（図5上段）**

今回の同定結果：イタヤガイ2例，右殻

これまでの同定結果：[イタヤガイ] 2例（河，2007）

備考：河（2007）の図54と図版79の3・5、およびNo. 3の資料に関しては東三洞貝塚展示館でケース内の実物資料を検討した。両方ともイタヤガイ右殻であった。

**3. カキ類の同定**

**a) 識別点**

貝面に用いられた貝の種類は、山崎（2001，2010）の指摘通り、中大形カキ類・アワビ類・ホタテガイの3群のみであり、類似製品でもイタヤガイとツキヒガイが追加されるだけであり、種の選択は極めて厳密であった。ただ、これまでの報告との食い違いが認められたのは主にカキ類であったので、

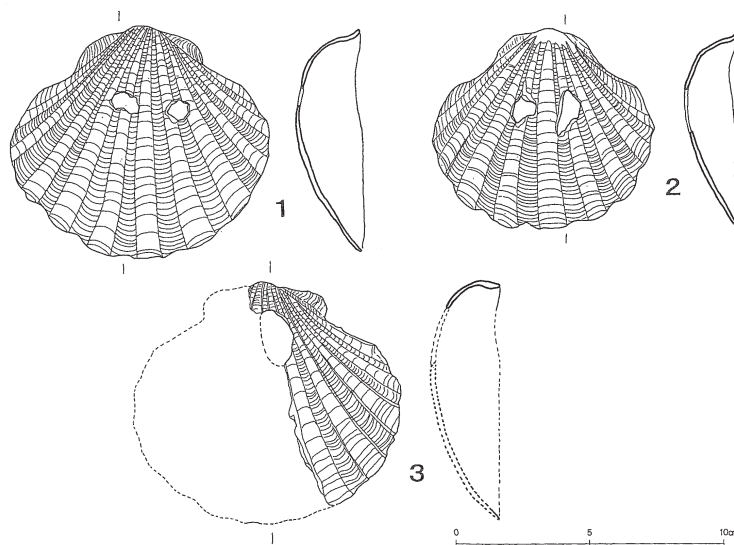


図5 韓国釜山東三洞貝塚出土のイタヤガイ穿孔品（河，2007）。

Fig. 5 Perforated materials excavated from Dongsam-dong Shell Midden, Busan, Korea (Ha, 2007).

今後の研究の参考になるように、図6に殻頂部内面を中心に図示し、表2に中大形カキ類の特徴についてまとめた。

不定形のカキ類なので、同定は容易ではないが、遺跡出土個体では状態にもよるが、殻頂部に刻みやシワ状彫刻を有するかどうかは確実な分類基準である。これらの形質をチェックすることによってかなり正しく同定できると考えられるが、イワガキとスミノエガキの識別は困難かもしれない。遺跡の立地と出土貝類の組成からの類推と共に、スミノエガキで殻が薄く、右殻がやや窪む傾向も判断基準となる。

**b) 韓半島南岸の先史遺跡出土の大形カキ類**

前述した黒橋貝塚や桑原飛橋貝塚・佐賀貝塚の例で指摘したように、貝面に利用されたカキ類は食用種を中心とした遺跡の貝類遺体中に見られず、意図的に持ち込まれた場合も多い。そうであるならば、貝面自体が他地域から搬入された可能性も否定できない。特にスミノエガキは韓半島南岸にも分布することが報告されており（例えば芝, 1934; 関, 2004）、搬入かどうかの検討が必要と考えられる。ただ、同地のスミノエガキに関する詳細な分布等の情報は少なく、また他の種と混同されている可能性もあり、これまでの知見をまとめておきたい。

先史時代遺跡からも金子（1992）は東三洞貝塚のカキを「マガキとスミノエガキ(?)」、上老大島山登貝塚のものを「大型のスミノエガキタイプ」と報告しており、金子・中山（1994）では佐賀県吉野ヶ里遺跡と関連させて洛東江下流域でのスミノエガキについて述べられている。近年の東三洞貝塚の報告では、マガキのみが同定され、図示されている（河, 2011）。東三洞博物館で、ケース内の標本と剥き取り断面の少数の大形カキ類を見た筆者の印象は、イワガキの可能性が高いというものであった。同様に金子ら（2002）もマガキとイワガキを報告している。また、三韓時代の大貝塚である金海会峴里貝塚では大形のカキが優占種であり、やはりマガキと同定・図示されている（松島, 2009）。この金海会峴里貝塚の少数の表採標本を見ての筆者の同定はスミノエガキであった。

これらのことから、韓半島南岸の先史遺跡出土の大形カキ類には、マガキ・イワガキ・スミノエガキの3種が含まれていると考えられた。

**4. 貝面等に利用されたカキ類・アワビ類の搬入**

**a) スミノエガキ**

韓半島南岸にスミノエガキは分布し、先史遺跡で

**表2 貝面等に利用されるカキ目Ostreoidaの比較. Table 2 Comparisons of Ostreoid species available to Shell Mask.**

イタボガキ科 マカキ	イタボガキ科 Crassostrea gigas	イワガキ Crassostrea nippona	スミノエガキ Crassostrea ariakensis	イタボガキ Ostrea denselamellosa	ベッコウガキ科 カキツノバタ Parahyotissa imermis (= Hyotissa imbricata)		
殻の外形 shape	サイズ size	左殻の殻表 surface of Left valve	右殻の殻表 surface of Right valve	殻頂部の構造 inner structure of umbral area	内面の構造 inner structure	重量 weight	生息環境/分布 habitat and distribution
略長方形 sub-rectangular	中形 medium	膨らむ・時に粗い放射肋有り inflated, sparsely radial ribs present	やや膨らむ・時に凹凸有り rather inflated, irregularly folded	刻み無し dentition absent	蜂の巣状の多孔構造無し Honeycomb-like porous structure absent	やや重い rather heavy	内湾域硬質底 inbayment area, intertidal, hard bottom
略長方形 sub-rectangular	大形 large	膨らむ・放射肋等無し inflated, radial ribs absent	やや扁平・成長肋粗い rather flat, growth lamellae sparse	刻み無し dentition absent	蜂の巣状の多孔構造無し Honeycomb-like porous structure absent	やや重い rather heavy	外海岩礁/日本海側に多い open sea coast, subtidal rocky shore; abundant on Japan sea coast
略長方形 sub-rectangular	大形 large	膨らむ・放射肋等無し inflated, radial ribs absent	扁平・成長肋粗い rather flat, growth lamellae sparse	刻み無し dentition absent	蜂の巣状の多孔構造無し Honeycomb-like porous structure absent	やや軽い rather light	内湾砂泥底/有明海・韓国南岸 inbayment area, subtidal sandy mud bottom; Ariake Bay & south coast of Korea
略円形 sub-circular	中形 medium	やや扁平・放射肋明瞭 rather flat, densely radial ribs present	扁平・成長肋密 flat, growth lamellae dense	刻み有り dentition present	蜂の巣状の多孔構造無し Honeycomb-like porous structure absent	やや重い rather heavy	内湾・潮下帯・砂礫底 inbayment area, subtidal sandy gravel bottom
	中形 medium	やや扁平・粗い放射肋明瞭 rather flat, sparsely radial ribs present	やや扁平・粗い放射肋明瞭 rather flat, sparsely radial ribs present	シワ状彫刻あり rugated structure present	蜂の巣状の多孔構造有り Honeycomb-like porous structure present	やや軽い rather light	外海・潮下帯・岩礁・暖流域 open sea coast, subtidal rocky shore; warm current area

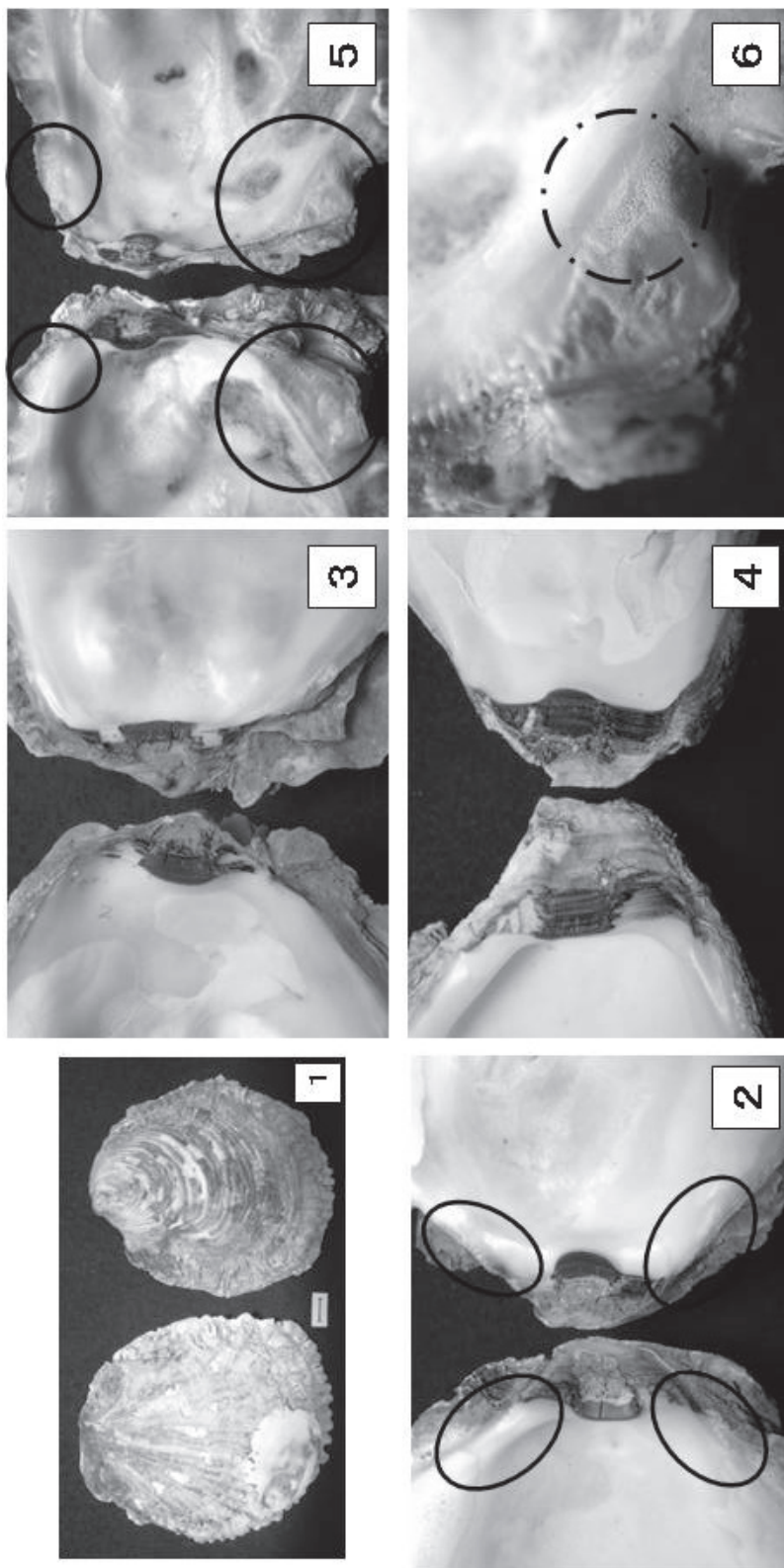


図6 中大形カキ類, 1. イタボガキ (CBM-ZM 153079), 2. イタボガキ殻頂部 (内面), 3. スミノエガキ殻頂部 (内面) (CBM-ZM 163525), 4. イワガキ殻頂部 (内面) (CBM-ZM 129674), 5. カキツババタ殻頂部 (内面) (CBM-ZM 103184), 6. カキツバタ: 蜂の巣状構造 (内面).  
実線: 刻みやシワ状の構造, 一点鎖線: 蜂の巣状構造, いずれも左殻/右殻.

Fig. 6 Medium and large size Ostreid. 1 : *Ostrea denselamellosa*, 2 : Inner umbral area of *Crassostrea nippona*, 5 : Inner umbral area of *Parahyotissa inermis*.

3 : Inner umbral area of *Ostrea denselamellosa*.  
6 : Honeycomb-like porous structure of *P.inermis*.  
Solid lines : dentition and rugated structure, semi-broken line : Honeycomb-like porous structure. Left valve / Right valve.



も確認できた。ただ、これまでの筆者の観察と図示された標本からは、この地域には阿高貝塚・黒橋貝塚両貝塚で貝面に利用されたような幅広いスミノエガキは見られないようであり<sup>注2</sup>、韓半島南岸から九州にスミノエガキが持ち込まれたとは考えにくいように思われる。弥生時代の貝塚ではあるが、佐賀市の牟田寄遺跡（佐賀市教育委員会，1998）からは、図7左に示したような殻長25cmを越える極めて大形で幅広いスミノエガキも確認されている（CBM-ZM 133976）。一方、黒橋貝塚（菊池，1998）・阿高貝塚（帆足，2005）や同地域の古代の下江中島遺跡（黒住，2013）からスミノエガキは報告されていない。ただ、もしかすると帆足（2005）の出土貝類図譜でマガキとして図示された右殻はスミノエガキかもしれないが、貝面に用いられるような大形の個体ではない。今後の調査結果等により結果が変わるかもしれないが、阿高・黒橋両貝塚のスミノエガキは、大形で幅広いタイプの本種が確認されている有明海奥部から持ち込まれたものの可能性も否定できない。

#### b) イタボガキ

桑原飛櫛貝塚のイタボガキも食用貝類遺体からは未確認であるが（下山，1996）、博多湾には本種が生息しており（例えば高橋・岡本，1969）、意図的な殻の持込みと考えられるが、遺跡前面の海域で採集された可能性も高い。各地で製品としてイタボガキが比較的多く出土しており（例えば金子・忍澤，1986）、以前にも簡単にコメントしたが（黒住，

1999）、筆者の知る範囲では食用で採取されたのは香川県の縄文後期・櫃石島の例（矢野，1983）程度である。内湾域で比較的大形になり、やや硬質なことから、打上げ個体が選択的に持ち込まれたと考えられる。貝輪としてのイタボガキの特性に関しては、忍澤（2011）に他の貝類と比較しての結果が詳細に述べられている。

#### c) マダカアワビ

熊本県の2例のマダカアワビは外海岩礁域に生息する種であり、沖の原貝塚周辺において得られた可能性も高い。水俣市南福寺貝塚のマダカアワビは前面の内湾海域にはこの種が生息しているとは考えにくく、外海側から搬入されたものと推測される。なお、永野・正岡（2010）の写真や山崎（2001）・水ノ江（2002）の実測図では、両資料とも殻表には穿孔生物による線状、あるいは網目状の痕跡が存在するものの、内面には明瞭な穿孔跡や他生物の付着は認められないようであり、また殻の周縁部に生貝を岩から剥がした欠損や海岸に打上げられていた明瞭な磨滅の痕跡もないようであった。これらのことから、筆者は、これらの資料は打上げられたマダカアワビの中から状態の良いものを選択した結果と考えている。天草地域における大形アワビ類の3種の生息量や殻サイズに関して詳細なデータを見つけることはできなかったが、波部・菊池（1960）は「マダカアワビ普通；クロアワビ多」としている<sup>注3</sup>。クロアワビも南福寺資料程度の10cmの個体は各地で普通であることから、貝面として本地域ではマダカア

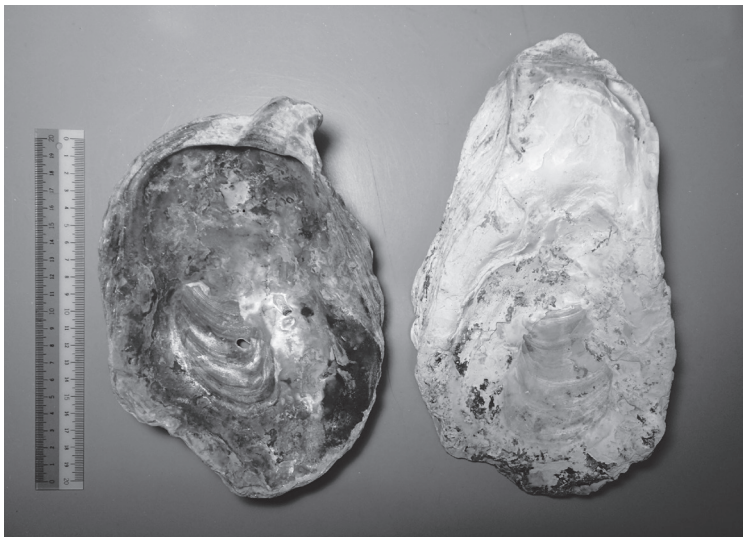


図7 佐賀市牟田寄遺跡（弥生時代）出土の大形スミノエガキ（CBM-ZM 133976）。

Fig. 7 Large specimens of *Crassostrea ariakensis* excavated from Mutayori Site, Saga, Japan.



ワビが選択されていた可能性も十分考えられる。

## 5. イタヤガイの製品

類似製品として、2遺跡のイタヤガイを取り上げた(表1)。白浜貝塚の資料に関しては、前述のように山崎(2001)では貝面の可能性も想定されるとされる。東三洞貝塚の資料(図5上段:国立济州博物館, 2005も参照)は東三洞貝塚展示館でホタテガイ貝面と並べて単独でケースに入れられており、貝面と評価されていると考えられる。筆者には、時代や形式変化という考古学的な研究を行う能力がないので、判断は下せないが、東三洞貝塚の資料は貝面の系譜のように思われた。

また、東三洞貝塚では、イタヤガイの殻頂部寄りにかなり大きな1孔を有すると推測される資料も出土している(図5下段;河, 2007)。類似した1孔穿孔品は本貝塚の別地点からも知られている(金子ら, 2002; Pl. 3, fig. 8)。このような貝殻に比較的大きな1孔を有する製品は、貝輪の未製品を除いても、カキ類を含め日本でも縄文時代の地域と時代を問わず出土しており、広く装飾品と理解されている(例えば金子・忍澤, 1986)。東三洞貝塚でも、カキ類やウチムラサキ等の厚質の二枚貝の1孔穿孔品はかなり多く出土している(河, 2007)。ただ、金子・忍澤(1986)で集成された日本の縄文時代の1孔穿孔品にイタヤガイや薄質な貝はほとんどない。このことから、筆者は東三洞貝塚の1孔のイタヤガイは貝面に関連している可能性もあるのではないかと想像している。

韓半島南岸におけるイタヤガイ利用は、入手しやすいホタテガイから、殻形態が類似し遺跡周辺で採集可能なイタヤガイへの2孔穿孔品としての利用が生じ、さらに、1孔への変遷も想定されるのではないだろうか。今後、貝面と関連させて韓半島南岸から九州を中心とした地域でのイタヤガイ穿孔品の考古学的な研究が望まれる。同時に、韓国南岸では、東三洞貝塚からイタヤガイの右殻の太い肋を研磨した製品(河, 2007)や金海岬岨から本種の左殻の研磨品も報告されており(崔ら, 2009)、この地域におけるイタヤガイの利用という視点も興味深いものと思われる。

## 6. ホタテガイの分布と搬入

ホタテガイは貝面や類似製品として3例が認められたが、報告された遺跡周辺の海域(対馬海峡・渤海)にはホタテガイは分布していない。しかし、英語で書かれているため参照されることの多い

Bernard et al. (1993) には、「Bohai」(渤海)がホタテガイ(*Patinopecten yessoensis*)の産地として挙げられており(p. 52)、これを根拠に本稿での分布の認識が間違っているとされる可能性も高い。まず、このホタテガイの分布を明らかにしておきたい。

渤海の貝類相を詳細に示した趙ら(1982)と斉ら(1989)の報告にはホタテガイは掲載されておらず、これらの記録からホタテガイは渤海には自然分布していなかったと結論づけられる。同様に、芝(1934)の韓半島の貝類目録では、ホタテガイは「咸南・江原・東海岸」と記録されており、渤海を含む東岸から南岸の分布記録はない。Bernard et al. (1993)の渤海の記録は、養殖等の非自然分布を示している可能性が高いと考えられる。韓半島東岸では、近年のまとめでもホタテガイの分布は江原道以北とされている(関, 2004; Lutaenko and Noseworthy, 2012)。つまり、今回の対象地域に最も近いホタテガイの分布域は日本海西端の韓半島東岸中北部であることがわかる。

東三洞貝塚のホタテガイ貝面は、縄文時代中期から後期初頭の考古年代に属すると考えられており(磯前, 1991; 山崎, 2001, 2010)、この時期に韓半島東岸から南岸にかけて寒流が卓越するという研究例を筆者は知り得ず、ホタテガイが東三洞周辺にまで分布を広げていたとは考えられにくい。また、東三洞貝塚のホタテガイ貝面は耳状突起、特に後部に磨滅が認められ、打上げ個体であると考えられる。韓半島南岸の東三洞だけでなく、西岸の徳積群島・蘇爺島貝塚やさらには中国・殷墟へも同半島東岸中北部からホタテガイが搬入されたと想定される。蘇爺島貝塚のAMS炭素年代は、 $3670 \pm 150$  yBPと報告されており(崔, 2000)、殷墟の年代と極めて大きな相違はないと思われる。また、殷墟へは山東半島を経て貝類が持ち込まれた可能性が高く(黒住, 2003)、ホタテガイの搬入ルートに関しても徳積群島と山東半島は比較的近距离に位置していることから、同半島が経由地といえよう。今後、様々な考古学的な検討を経なければならぬが、中国・中原の殷と韓半島西岸中北部が関係するという事象は興味深いものであると思われる。

## 謝辞

資料の実見に際して熊本市立熊本博物館(阿高貝塚資料)・熊本県教育委員会(黒橋貝塚資料)および佐世保市教育委員会(下本山岩陰資料)にお世話になった。木下尚子先生には原稿の改稿と国外文獻

の提供でお世話になった。忍澤成視氏には入手しづらい国外文献をご恵与頂いた。西田 巖氏に有明海の巨大なスミノエガキを提供頂いた。山下博由氏はスミノエガキの情報等をお寄せ頂いた。阿高・黒橋両貝塚および東三洞貝塚の資料は（公財）高梨学術奨励基金の調査時に見ることができた。また、本報告の一部には科学研究費（15H05966、代表：金原正明；16H0310、代表：島立理子）を用いた。これらの方々にお礼申し上げる。

注1 なお、北海道では縄文期に、ヤスで突かれた痕跡として1～2孔を有するホタテガイが知られており（西本，1984；p. 7）、当然、これまでの研究でもヤスの痕跡と考えられるものは排除されている。

注2 韓半島南岸中部のソンジン江の漁港では、地先で採集された大形幅広のスミノエガキが得られているという（山下博由氏，私信）。

注3 メカイアワビは、波部・菊池（1960）のリストに搭載されていない。

#### 引用文献

- 安楽 勉（編）1980. 白浜貝塚，福江市文化財調査報告書，（2）：1-141，1 pl.
- 麻生 優 1972. 下本山岩陰，佐世保市教育委員会，長崎。
- Bernard, F.R., Y.Y. Cai and B. Morton 1993. Catalogue of the living marine bivalve molluscs of China. 146 pp. Hong Kong Univ. Press, Hong Kong.
- 崔 夢龍・申 叔静・金 庚澤・金 仙宇・金 範哲 2000. 徳積群島の考古学的調査研究. 190 pp. ソウル大学校博物館，韓国。（in ハングル）
- 崔 鐘圭・他（編）2009. 金海曾硯里貝塚Ⅱ，pp. 247-273. （財）三江文化財研究院，韓国。（in ハングル）
- \*佐賀市教育委員会（編）1998. 牟田寄遺跡Ⅵ，佐賀市文化財調査報告書，（89）。
- 江坂輝彌 1960. 土偶. 352 pp. 校倉書房，東京。
- 江坂輝彌 1974. 土製仮面の変遷. *In* 江坂輝彌・野口義磨（編），古代史発掘3，土偶芸術と信仰，pp. 130-135. 講談社，東京。
- 河 仁秀（編）2007. 東三洞貝塚，浄化地域発掘調査報告書（Report on Research of Antiquities of Busan Museum, vol. 24）. 482 pp. 釜山博物館，韓国。（in ハングル）
- 河 仁秀（編）2011. 東三洞貝塚浄化地域，動物遺

- 体研究報告. 165 pp. 福泉博物館，韓国。（in ハングル）
- 波部忠重・菊池泰二 1960. 天草臨海実験所近海の生物相，第1輯，軟体動物. 70 pp. 九州大学理学部附属天草臨海実験所，熊本。
- 帆足俊文（編）2005. 阿高貝塚. 熊本県文化財調査報告，（223）：1-224，32 pls.
- 国立济州博物館（編）2005. 韓国－日本沖繩との貝製品を通じた先史時代の文化の再発見. 315 pp. 国立济州博物館，韓国。（in ハングル）
- \*中央研究院歴史語言研究所（編）1972. 小屯，第1本，遺址の発現与発掘，丙組，中組墓葬（中国考古報告集之二）。
- 磯前順一 1991. 縄文時代の仮面. 考古学雑誌，77（1）：1-58.
- 井澤洋一（編）1996. 桑原遺跡群2，福岡市埋蔵文化財調査報告書，（480）：1-120，2 pls.
- 金子浩昌 1992. 朝鮮半島の動物遺存体－南部島嶼地域の貝塚を中心に－. 季刊考古学，（38）：79-82.
- 金子浩昌・呉 世筵・安 徳任 2002. 動物遺体. 東三洞貝塚Ⅳ，国立博物館古蹟調査報告書，（34）：1-217. ソウル，韓国。
- 金子浩昌・中山清隆 1994. 韓国古代遺跡出土の動物遺体資料からみた文化史的研究－南部地域の資料を中心として－. 青丘学術論集，（5）：4-61.
- 金子浩昌・忍澤成視 1986. 骨角器の研究，縄文篇Ⅱ. 398 pp. 慶友社，東京。
- 菊池泰二 1998. 黒橋貝塚出土の貝類遺骸. 黒橋貝塚. 熊本県文化財調査報告書，（166）：257-261.
- 木村幾多郎・中山清隆 1992. 東アジアに共通する要素. 季刊考古学，（38），3 pls.
- 吉良哲明 1959. 原色日本貝類図鑑. 増補改訂版. xiv + 239 pp. + 71 pls. 保育社，大阪。
- 近藤喬一 1995. 商代寶貝の研究. アジアの歴史と文化，（2）：1-55，2 pls.
- 黒住耐二 1999. イタボガキは絶滅危惧種？. 九州の貝，（52）：23-31.
- 黒住耐二 2003. 貝類学からみた中国古代遺跡出土貝類の供給地－タカラガイ類を中心に－. *In* 木下尚子（編），中国古代のタカラガイ使用と流通，その意味－商周代を中心に－，資料集，pp. 12-40. 熊本大学考古学研究室。
- 黒住耐二 2013. 下江中島遺跡から得られた貝類遺体. 下江中島遺跡・上日置女夫木遺跡，熊本県文化財調査報告. 本文篇，（278）：83-92，94.
- Lutaenko, K.A. and R.G. Noseworthy 2012.

- Catalogue of the living Bivalvia of the continental coast of The Sea of Japan (East Sea). 247 pp. Dalnauka, Vladivostok, Russia.
- 松島義章 2009. 金海曾硯里貝塚出土貝類. *In* 崔鐘圭・他(編), 金海曾硯里貝塚Ⅱ, pp. 247-273. (財)三江文化財研究院, 韓国. (in ハングル)
- 関 德基 2004. 韓国貝類図鑑(新原色韓国貝類図鑑. 改訂増補版). 566 pp. 関貝類研究所, 韓国. (in ハングル)
- 水ノ江和同 2002. 仮面形貝製品について. *In* 古代吉備研究会委員会(編), 環瀬戸内海の考古学: 平井勝 氏追悼記念論文集, 上巻, pp. 185-194. 古代吉備研究会, 岡山.
- 永野 仁・正岡大実(編)2010. MASK-仮面の考古学-, 大阪府立弥生文化博物館図録. 107 pp. 大阪府立弥生文化博物館, 大阪.
- 中山清隆 1992. 貝面・土偶・猪型土製品の新資料. 季刊考古学, (38): 78.
- 西本豊弘 1984. 北海道の縄文・続縄文文化の狩猟と漁撈. 国立歴史民俗博物館研究報告, (4): 1-15.
- \*小郡 隆(編)1976. 洗谷貝塚. 福山市教育委員会・洗谷貝塚発掘調査団.
- 奥村 清・田口公則 2009. 福岡県海の中道海岸で採集された現生カズウネイタヤ. ちりぼたん, 39 (3・4): 170-175.
- 忍澤成規 2011. 貝の考古学, ものが語る歴史22. 430 pp. 同成社, 東京.
- 齊 鍾彦・馬 綉同・王 禎瑞・林 光宇・徐 鳳山・董 正之・李 鳳蘭・呂 瑞華 1989. 黄渤海の軟体動物. 309 pp. + 13 pls. 農業出版社, 北京, 中国.
- 芝 昇 1934. 朝鮮軟体動物目録. 朝鮮博物学会雑誌, (18): 6-31.
- 正林 護(編)1989. 佐賀貝塚, 峰町文化財調査報告書, (9): 1-248, 6 pls.
- 島津義昭 1992. 縄文時代の貝面-熊本県阿高貝塚の出土品を中心に-. *In* 大阪・郵政考古学会(編), 平井尚志先生古希記念考古学論攷, 第Ⅱ集, pp. 17-23. 大阪・郵政考古学会, 大阪.
- 下山正一 1996. 桑原飛櫛貝塚の史前遺物(その1)-貝類について. 桑原遺跡群2, 福岡市埋蔵文化財調査報告書, (480): 97-110.
- 高橋五郎・岡本正豊 1969. 福岡県産貝類目録. iii + 154 pp. 自刊.
- 高橋 健 2007. 骨角器・骨角器について. *In* 山崎真治・高橋 健, 彦崎貝塚の考古学的研究, 東
- 京大学総合研究博物館研究報告, (43): 225-241, 272-279, pl. 46.
- 田中祐二(編)2002. 特別展 鳥浜貝塚とその時代. 72 pp. 福井県立若狭歴史民俗資料館, 小浜市, 福井.
- 高木正文・村崎孝宏(編)1998. 黒橋貝塚, 熊本県文化財調査報告書, (166): 1-293, 56 pls.
- 山本愛三 1989. 長崎県・佐賀貝塚の貝類より見た考察. 佐賀貝塚, 峰町文化財調査報告書, (9): 237-241.
- 山崎純男 2001. 海人の面-九州縄文時代精神文化の側面-. *In* 久保和士君追悼考古論文集刊行会(編), 久保和士君追悼考古論文集, pp. 1-20. 久保和士君追悼考古論文集刊行会, 愛媛.
- 山崎純男 2010. 九州における貝製仮面について. *In* 永野 仁・正岡大実(編), MASK-仮面の考古学-, 大阪府立弥生文化博物館図録, pp. 84-91. 大阪府立弥生文化博物館, 大阪.
- 矢野重文 1983. 櫃石島より出土した貝類の考察. *In* 林 正弘・藤好史郎(編), 瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報Ⅵ, pp. 171-175. 香川県教育委員会.
- 趙 汝翼・程 濟民・趙 大東 1982. 大連湾産軟体動物誌. 167 pp. + 12 pls. 海洋出版社, 中国.
- 鐘 柏生 1993. 史語所蔵殷墟海貝及其相關問題初探. 中央研究院歷史語言研究所集刊, 64 (3): 687-737.

\*直接参照できなかった文献